九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

フランス語の再帰的代名動詞と中立的代名動詞

井口,容子 広島大学助教授

https://doi.org/10.15017/9987

出版情報: Stella. 17, pp. 49-64, 1998-06-25. 九州大学フランス語フランス文学研究会

バージョン: 権利関係:

フランス語の再帰的代名動詞と中立的代名動詞

井 口 容 子

1. はじめに

フランス語の代名動詞には多様な用法がみとめられ、伝統文法においてはこれらを「再帰的代名動詞」、「相互的代名動詞」、「受動的代名動詞」、「本質的代名動詞」などの名称で表わしている。近年の研究においてはこれらの用法のうち、他動詞との規則的な対応関係にあるものを、つぎの2つのタイプに大別する考え方がほぼ主流となっている。

- (I) 代名動詞の主語が、対応する他動詞の主語にあたるもの
- (Ⅱ)代名動詞の主語が、対応する他動詞の直接目的語にあたるもの
- (I)のタイプに属するのは、「再帰的代名動詞」と「相互的代名動詞」である。一方(II)のタイプとして分類されるのは、伝統文法でいう「受動的代名動詞」と、いわゆる「本質的代名動詞」のうち、対応する他動詞から派生された自動詞と見なされうるものである。Ruwet (1972)以来、この2つの用法はそれぞれ「中動的代名動詞 construction pronominale moyenne」、「中立的代名動詞 construction pronominale neutre」と呼ばれることが多く、筆者もこれまでこの名称を採用してきた。だがこの「中動」という用語は、たとえばギリシア文法の「中動態」などを考えてみれば明らかなように、本来、より広い意味的状況にたいしてもちいられる概念である。本稿においては特にKemmer (1994)の引用などをとおして、この後者の意味で「中動」という語をもちいることが多い。そこで「中立的代名動詞」はそのままこの名称を採用することにするが、Ruwetのいう「中動的代名動詞」にかんしては、伝統文法の「受動的代名動詞」という用語をもちいることにする。以下にこれらの用法の例をあげておく。

〈タイプI〉

(1) Elle se regarde dans la glace. (再帰的代名動詞)

- (2) Ils se battent l'un l'autre. (相互的代名動詞) 〈タイプ II〉
 - (3) Ce livre se vend bien. (受動的代名動詞)
 - (4) Le verre s'est cassé. (中立的代名動詞)

ところで、フランス語における代名動詞のさまざまな用例を検討していると、必ずしもこの2つのタイプのあいだの境界は截然としたものではないのではないか、と思われてくることが多々ある。特に再帰的用法と中立的用法のあいだの境界は微妙である。たとえば se coucher をどう分析するのか。GRIMSHAW(1982)は生成文法の系統の一理論である「語彙機能文法 Lexical Functional Grammar」によって代名動詞を分析しているが、se coucher は中立的代名動詞に相当する «Intrinsic Clitic» の例と見なし、《Reflexive Clitic》とは区別している。だが se coucher は一般的には再帰的代名動詞に分類されることが多い。

本稿においては、se coucherに代表される「姿勢にかんする動詞」と、se diriger のような「移動を表わす動詞」に特に注目しながら、再帰的代名動詞と中立的代名動詞について考察していきたい。

2. 中立的代名動詞の特性

本節においては、中立的代名動詞の諸特性と見なされるもののうち、再帰的 代名動詞との関係を論ずるにあたって関与的と思われるものを簡単にまとめ、 3 節以下の具体的な分析にそなえたい。

2.1. 動作主性 (agentivité)

中立的代名動詞を再帰的代名動詞から区別する特性としてしばしば指摘されるものに、主語の意味役割にかんするものがある。再帰的代名動詞の構文の主語は、対応する他動詞の主語と同じ意味役割を担っており、多くの場合「動作主 agent」である。これにたいして中立的代名動詞の主語が担う意味役割は、他動詞構文の直接目的語のそれと同じであり、「被動者 patient」あるいは「主題 thème」ということができる。

この相違は、「選択制限 restriction de sélection」の相違としてあらわれる。

(5) が示すように、再帰的代名動詞の主語は対応する他動詞構文の主語と同じ選択制限を受けるのにたいし、(6) に見られるように中立的代名動詞の主語は他動詞構文の直接目的語と同じ選択制限を受ける。

2.2. 語彙的アスペクト

フランス語の転換動詞(verbe à renversement:自動詞構文の主語が他動詞構文の目的語と同一である、という特性をもつ動詞)には、再帰代名詞をともなうもの(すなわち「中立的代名動詞」: ex. se briser)と、再帰代名詞をともなわないもの(ex. fondre)があるが、ZRIBI-HERTZ(1987)はこの2つを区別する重要な特性として、アスペクトの相違を指摘する。中立的代名動詞は「完了的 perfectif」であるのにたいして、非再帰形は「未完了的 imperfectif」であることが多い、というのである。

LEVIN & RAPPAPORT HOVAV (1995) は,完了性に近い概念である「方向づけられた変化 directed change」を表わすという特性を,「非対格性 unaccusativity」の重要な指標ととらえている。たとえば非対格動詞の代表的な例と見なされる arriver は,到達点に向かって「方向づけられた」空間的変化を表わす動詞である。また se briser は brisé という過去分詞で表わしうる最終状態に向かって「方向づけられた」状態変化を表わすものであるといえる。LEVIN & RAPPAPORT HOVAV は,「方向づけられた変化」という概念は

《telicity》のようなアスペクト的概念とは異なる、としているが、少数の例外はあるものの¹⁾、「方向づけられた変化を表わす動詞」の大部分はアスペクト的にも完了的であるといえる。次節で示すように、中立的代名動詞は一般に非対格動詞と見なされることを考えれば、この特性もやはり中立的代名動詞を特徴づけるものであるといえる。

2.3. 中立的代名動詞と非対格仮説

近年の生成文法の系統の理論による代名動詞分析においては、中立的代名動詞を非対格動詞と見なす点において、ほぼ見解が一致している。たとえば Zribi-Hertz (1987) は se briser, se rouiller のような中立的代名動詞の構文を「再帰能格構文 construction réflexive ergative」と呼び、非対格動詞と見なしている。また Legendre (1989) はフランス語の非対格動詞にかんする論文であるが、このなかでは arriver や fondre のような非再帰形のものと、se casser のような再帰形のものがともに分析の対象となっており、興味ぶかい。

2.1 節, 2.2 節で見た中立的代名動詞の2つの特性, すなわち主語名詞句が 非動作主であるという特性および語彙的アスペクトにかんする特性は, いずれ も一般的に非対格動詞の特性と見なされるものである。

3. 姿勢にかんする動詞

本節では se lever, se coucher, s'incliner, s'asseoir 等の代名動詞を検討したい。これらのような概念を表わす動詞は、研究者によってさまざまな名称で呼ばれている。Levin & Rappaport Hovav (1995) は「空間的配置の動詞 verb of spatial configuration」と呼び、Kemmer (1994) は「姿勢の変化 change in body posture を表わす動詞」と呼ぶ。また Melis (1990) はこれらの代名動詞と、4節で検討する se diriger のような「移動」の概念を含む代名動詞をあわせて «verbe dynamique» と呼ぶ。

本稿においては、se lever、s'incliner 等を「姿勢にかんする動詞」と呼ぶ ことにしたい。se diriger のようなタイプの動詞は、「移動を表わす動詞」と して4節であらためて検討する。KEMMER の「姿勢の変化を表わす動詞」と いう名称をそのまま採用しないのは、以下で検討するように、必ずしも「変 化」を表わすものばかりではなく、「状態」を表わすものもあるからである。

3.1 se lever, se coucher

出発点として、(7)(8)に見られるような、se lever、se coucher の 2 つの代名動詞を考えてみよう。

- (7) Paul s'est levé tôt ce matin.
- (8) Marie se couche tard.

GRIMSHAW(1982)は、se coucher を、se briser や s'endormir とともに、本質的代名動詞といわれるもののなかでも、他動詞とのあいだに《causative-inchoative》の生産的(productive)な関係を持つグループに属するものとして位置づけている。GRIMSHAW はこのタイプの代名動詞を、「起動化規則 Inchoativization」によって対応する他動詞から派生される自動詞と見なす。

語彙的アスペクトの観点からいえば、これらの代名動詞によって記述される「出来事 event」は、levé や couché の過去分詞で表わしうるような「最終状態 état final」への移行であり、完了的であるということができる。このように se lever、se coucher は、se briser のような典型的な中立的代名動詞とかなり 共通する点をもっているといえる。

しかしながら、主語のもつ意味役割という面から見れば、少なくとも(7)、

(8) のような文における se lever, se coucher の主語は, se briser 等のそれ とは異なり、「動作主」であるといえる。この点ではむしろ se regarder のような再帰的代名動詞と共通している。

このように se lever, se coucher は中立的代名動詞と再帰的代名動詞の両方の特性を兼ね備えているといえる。

3.2. s'incliner, se pencher

つぎに s'incliner を検討してみよう。(9) のような例を見ると, この代名動 詞もまた, 対応する他動詞にたいする自動詞と見なすことができるのではない かという印象を受ける。

- (9) a. incliner une tige
 - b. La tige s'incline vers le sol.

(以上, ROTHEMBERG 1974)

だが語彙的アスペクトの点からいうと、s incliner は「傾く」という完了的な意味にももちいられうるが、(10) のように「状態 state」を表わすことも多

い。この点において se briser, s'allumer 等の典型的な中立的代名動詞とは異なる。

- (10) a. chemin qui s'incline en pente douce (Le Petit Robert)
 - b. Le mur s'incline dangereusement. (Lexis)

「動作主性」にかんしてはどうだろうか。(10) の chemin, Le mur はいずれも動作主とは見なしがたい。だが(11)の II はあきらかに動作主である。

- (11) Il s'incline devant la maîtresse de maison. (Melis 1990) Melis (1990) は,この文は(12)のような身体の部分を表わす名詞を直接目 的語とする文とほぼ同義であるとし,(13)のような用法との接近を示唆する。
 - (12) Il incline la tête devant la maîtresse de maison.
 - (13) Elle se coiffe.

cf. Elle coiffe ses cheveux en chignon. (Melis 1990)

MELIS は se coiffer, se peigner, se maquiller, se raser, se moucher 等の「身体の手入れ soins corporels」を表わす代名動詞の用法を「換喩的用法 emploi métonimique」と呼んでいる。これらの代名動詞の構文においては,主語名詞句と再帰代名詞のあいだに厳密な意味での同一指示関係は成立しておらず,再帰代名詞の指示対象は主語名詞句のそれの身体の一部にあたるものだからである。したがって(13)に見られる se coiffer は,coiffer ses cheveux といった身体の一部を表わす名詞を直接目的語とした表現とほぼ同義になるのである 2 。例文(11)も例文(12)とほぼ同義であるということができるのであれば,s'incliner も「換喩的用法」に含めることができるようにも思われる。だが一方において(10 a-b)のように無生物を主語とする場合は「換喩的用法」と見なすことはできない。

s'incliner に近い意味をもつ se pencher の場合、代名動詞形は「傾いている」という「状態」の意味ではもちいられない。この意味は再帰代名詞をともなわない自動詞形の pencher で表わされる。

- (14) a. Le mur penche dangereusement.
 - b. * Le mur se penche dangereusement.
- (15) a. Cette tour penche un peu.
 - b. * Cette tour se penche un peu.

「動作主性」の面からいえば、se pencherは多くの場合、「人間」を主語と

する。

- (16) Marie s'est penchée sur le livre.
- (17) Elle se pencha sur le bout de journal.

(Escarpit, La ronde caraïbe, p. 19)

se pencher に人間以外の主語をとる用法がないわけではない。

- (18) Les cyprès se penchent sous la tempête. (ロワイヤル仏和中辞典)
- (19) La grande flamme se pencha dans toute sa hauteur vers le mur du fond.

(RAMUZ, in Trésor de la langue française, tome 12) ただ (18) は嵐の中,たなびいてはやや持ち直すというのをくり返す糸杉の描写であり,人間が身をかがめる様を模した擬人的なニュアンスを感じさせる。 (19) も,単に無生のものがその空間的位置を変えるというのとは異なる動的な印象,「動作主性」に近いものを感じさせる。

3.3. 非対格性

「姿勢にかんする動詞」を非対格性の面から考えてみよう。Levin & Rappaport Hovav (1995) は、「座る」、「立つ」等の意味をもつ動詞を「空間的配置の動詞 verb of spatial configuration」と呼び、《assume position verb》,《maintain position verb》,《simple position verb》の3つの下位クラスに分類されるものとする。(7)、(8)のような文に見られる se lever、se coucher は (assume position verb) であるということができる。Levin & Rappaport Hovav によると、《assume position verb》は、「方向づけられた変化」(本稿2.2節を参照)を表わすものであり、非対格動詞と見なされる。(20)、(21)の s'asseoir、se dresser も同様に《asssume position verb》であり、非対格動詞ということができる。

- (20) Elle s'assoit sur la chaise.
- (21) Elle s'est dressée sur son lit.

s'asseoir は Legendre (1989) の分析においても,かなり非対格性の高いものとして示されている³⁾。

同じ se dresser でも、つぎのような例はどうだろうか。

(22) tour qui se dresse sur la colline (新スタンダード仏和辞典) この場合, se dresser は「変化」を表わすのではなく「状態」を表わすもので

- ある。(22) の se dresser は、Levin & Rappaport Hovav (1995) のいう «simple position verb» であるといえる。このタイプの動詞は、exister や (23) の rester のような「存在」を表わす動詞と意味的に近いものである。
 - (23) Il reste encore du lait dans le frigidaire.

LEVIN & RAPPAPORT HOVAV によると、«simple position verb»は、exister, rester 等とともに、«existential linking rule»により、非対格構文をとる。したがって(22)の se dresser も非対格動詞である、ということになる。

それでは s'incliner, se pencher はどうだろうか。このタイプの動詞については、完了的な意味の場合と、未完了的な意味の場合を区別して考える必要がある。まず完了的な意味の例であるが、

- (24) La tige s'incline vers le sol. (= (9b))
- (24) のような文に見られる s'incliner は非対格動詞と見なしうるであろう。 Levin & Rappaport Hovav (1995) のいう「方向づけられた変化」を表わ すものだからである。
 - (25) Marie s'est penchée sur le livre.

se pencher の場合, 3.2 節で指摘したように主語に「動作主性」が強く感じられることを考えると, 一項述語 (one-participant event) である非対格動詞と見なしてよいのか, むしろ Melis (1990) のいう「換喩的用法」なのではないか, という疑問が起こる。ただ, s'asseoir を非対格動詞と見なすならば, se pencher もまた非対格動詞と考えられないこともない。この点にかんしては, 6 節においてまた検討する。

つぎに未完了的な意味をもつ場合を考えてみよう。

- (26) Le mur s'incline dangereusement. (= (10b))
- (26) のような文における s'inliner は、未完了的な「状態」を表わすものであり、「方向づけられた変化」を表わすものではない。Levin & Rappaport Hovav (1995) はこのような意味の場合、(22) の se dresser と同じタイプの «simple position verb» と見なす。したがって «existential linking rule» によって非対格動詞として分類されることになる。

4. 移動を表わす動詞

フランス語の代名動詞には,主語名詞句の「空間的移動」を表わすものがか

なり見られる。se diriger、s'introduire、se rendre 等がその例である。

- (27) Il s'est dirigé vers moi. (新スタンダード仏和辞典)
- (28) Le voleur s'est introduit dans la maison.
- (29) Elle s'est rendue à la gare.

つぎの(30)のような例を見ると、このタイプの代名動詞も、中立的代名動詞と同様に、対応する他動詞とのあいだに「使役交替 causative alternation」の関係をもつものであるかのような印象を受ける。「対象の空間的移動を引き起こす – 空間的に移動する」という概念を、その意味のうちに含む「他動詞 – 自動詞」のペアと見なすことができるからである。

- (30) a. On dirige le bateau vers le port.
 - b. Le bateau se dirige vers le port.

だが s'introduire の場合は、代名動詞形の主語は有生のものにかぎられる。

- (31) a. On a introduit l'invité dans le salon.
 - b. L'invité s'est introduit dans le salon.
- (32) a. On a introduit la clef dans la serrure.
 - b. * La clef s'est introduite dans la serrure.

la voiture のように、自ら動くという性質をもつものでさえ *s'introduire* の主語にはなれない。

- (33) a. On a introduit la voiture dans le garage.
 - b. *La voiture s'est introduite dans le garage.

「有生のものにかぎられる」という条件は、他動詞 introduire の主語においてもみとめられるものである。したがって s'introduire の主語は、対応する他動詞構文の直接目的語とではなく、主語と同じ選択制限を受けているということができる。2.1 節で見たように、これは中立的代名動詞ではなく、再帰的代名動詞の特性である。

語彙的アスペクトの観点からはどうだろうか。

- (34) Paul se dirigeait vers le guichet.
- (34) のような文に、継続相としての解釈が可能であることにも表われているように、se diriger は未完了的であり、Vendler (1957) のいう «activity» であるということができる。

「移動を表わす動詞」にかんしては、6節においてさらに詳しく検討する。

5. 類型論的考察

Kemmer (1994) は,「再帰」という名称で一括してとらえられがちな「状況 situation」を,「中動 middle situation」と「再帰 reflexive situation」の2つに区別する。フランス語でいえば, (35) が「中動」, (36) が「再帰」の例である。

- (35) Paul se lave.
- (36) Paul se regarde dans la glace.

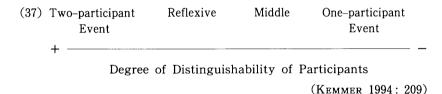
フランス語においては、「中動」も「再帰」も同じ se という「標識marker」で表わされるため、この2つの区別はとらえにくいが、ラテン語やロシア語などではそれぞれ別の標識によって表わされる。たとえばラテン語においては「中動標識 middle marker」は動詞接尾辞のーrであるのにたいして、「再帰標識 reflexive marker」は代名詞の se である。ロシア語では中動標識はーsja、再帰標識は sebja である。Kemmer はフランス語やドイツ語、あるいは北米インディアンの言語であるモハーヴィ語(Mohave)等に見られるような再帰・中動が同じ標識で表わされる言語を《one-form language》、ラテン語やロシア語のように異なる標識をもつ言語を《two-form language》と呼ぶ。《two-form language》にはこの他に、古典ギリシア語、サンスクリット、トルコ語、ハンガリー語等が含まれる(Kemmer 1994: 188-190)。

再帰と中動のあいだに意味的に一線が引かれるという考え方、そしてその区別を文法的に実現する言語が数多く存在するという事実は非常に興味ぶかい。再帰も中動も、「出来事」にかかわる2つの「関与者 participant」が同一の「存在 entity」である、という点においては共通している。だが動詞の意味内容により、この同一指示が単なる偶然にすぎないものと、かなりの確率で予想されるものがある。「洗う」という行為はかなりしばしば、自らを対象としておこなわれる。「(髭を)剃る」という行為になると、さらにその可能性は高いであろう。これら「身体の手入れ」にかかわる行為は、Kemmer (1994)によると、多くの言語で中動標識をともなって表現される。これにたいして「見る」というような行為は、自らを対象とすることもありうるが、他者に向けられる方がより一般的な事例といえるだろう。このような動詞にたいしては再帰標識がもちいられる。

「姿勢の変化を表わす動詞」,「移動を表わす動詞」にかんしても,Kemmer

(1994) は多くの言語において中動標識をともなって実現される,と指摘する。 Kemmer はこれらの動詞を「身体の手入れ」を表わす動詞とともに,《body action verb》と呼ぶ。《body action verb》は,一般に有生の主体によって自らに向けられる行為である,という社会的・慣習的な通念が存在するがゆえに,ひとつの《natural class》をなすものと考えうるのである。このため,他者に向けられるのを常とする一般の二項述語とは異なった文法的ふるまいを見せるのも,当然のことと考えられるのである。

Kemmer (1994) は再帰、中動はともに他動詞構文と自動詞構文のあいだに位置するものと考え、(37) に示す «Degree of Distinguishability of Participants» のスケールの上に並ぶものとする。



6. 再帰的代名動詞と中立的代名動詞

以上,「姿勢にかんする動詞」と「移動を表わす動詞」に注目しながら,再帰的代名動詞と中立的代名動詞の問題を考察してきた。この2つのタイプの動詞は,再帰的代名動詞と中立的代名動詞の両方の性質を兼ね備えたものであるといえる。5節で見たように,Kemmer(1994)は「姿勢の変化を表わす動詞」と「移動を表わす動詞」をともに「中動」と見なし,意味的にいって「再帰」と純粋な一項述語の中間に位置するものであると考える。

Melis (1990) は再帰的代名動詞と相互的代名動詞を «tour subjectif», 中立的代名動詞と伝統文法でいう受動的代名動詞を «tour objectif» と呼ぶが, この2つは連続的なものであり,境界例が多く存在することを指摘する。

MELIS の分析においては、se diriger を s'éparpiller、se répandre 等とともに «verbe dynamique» として分類し、 «tour subjectif» と «tour objectif» の境界的な例であるとしている。se diriger にかんしては 4 節で見た。s'éparpiller、se répandre にかんしては、MELIS はつぎの例をあげている。

(38) a. Les billes s'éparpillent.

- b. La poussière se répand partout.
- (39) a. Les enfants s'éparpillent.
 - b. La foule se répand dans toutes les pièces du palais.

(以上, MELIS 1990: 78)

対応する他動詞の直接目的語が代名動詞の主語になっている, という点においては中立的代名動詞と共通しているが, s'éparpiller, se répandre は(39)のように、「動作主」と見なしうる有生の主語をとることも可能である。

たしかにこの3つが境界的な事例,もっと具体的にいうならば再帰的代名動詞と中立的代名動詞の中間的なステイタスにあるということにかんしては異論はない。ただ,一口に「境界例」といっても,se diriger と,s'éparpiller,se répandre ではかなり性質が違うものであるように思われる。それはまず語彙的アスペクトにおける相違である。

- (40) Les billes sont éparpillées.
- (41) Les papiers sont répandus sur le plancher.

動作主表現をともなわない受動文にした場合, être éparpillé, être répandu は (40), (41) のように, 動作の結果の「状態」を表わしうる。これにたいして être dirigé は (42) に見られるように, 現在進行中の動作としての受動の意味を表わすのみである 4)。

(42) Le bateau est dirigé vers le port.
このことが示すように、se diriger は未完了的な動作を表わすものであり、
VENDLER (1957) のアスペクトの4分類にしたがえば «activity» にあたるものである。これにたいして s'éparpiller や se répandre、あるいは se réunir 等は完了的であり、VENDLER のいう «achievement» である。se diriger は「動作」そのものにスポットライトをあてる動詞であるのにたいして、s'éparpiller や se réunir 等は、「動作」よりはむしろ、その結果到達する「状態」に意味的重点がおかれる動詞であるといえる。

主語名詞句の「動作主性」にかんしても、se diriger と s'éparpiller 等は異なる。Trésor de la langue française (tome 7) は se diriger の主語にかんして «Le sujet désigne un être vivant, un objet ou un corps mobile» と指摘している。つまり se diriger の主語は有生物あるいは、無生物であっても自ら動くという性質をもつもの(le bateau などがこれにあたる)にかぎら

れるのである。「移動を表わす動詞」として 4 節で se diriger とともに検討した s introduire になるとさらにこの条件は厳しくなる。(43) が示すように、 la voiture のような名詞句 s introduire の主語となることはできない。

(43) * La voiture s'est introduite dans le garage. (=(33b)) これにたいして, s'éparpiller, se répandre では, 無生物もまったく問題なく 主語として受け入れられる。

s'éparpiller, se répandre 等の場合,éparpillé,répandu という過去分詞で表わしうる最終状態へ移行する対象としては,有生・無生を問わずさまざまの可能性がある。 $(39\ a-b)$ は,たまたまその対象が人間であった例にすぎない。そして対象が人間である場合,「散らばる」という状態になるためには通常,自分の足で移動することになる。このため「動作主性」が付随してくるのである。このように考えると, $(39\ a-b)$ のような文において s'éparpiller,se répandre 等の主語名詞句が担っている「動作主」の意味役割は,まさに Keyser & Roeper (1984) のいう「二次的動作主 secondary agent」であるということができる。

se diriger や s'introduire の場合は、これとは根本的に異なる。これらの代名動詞の主語はまさに «sujet selectionnel» であり、本来的に動作主の意味役割を担うものであるといえる。

以上の考察から、「境界例」と見なされるもののなかには、「完了/未完了」という語彙的アスペクトにおける相違、そして主語名詞句が「本来の動作主/二次的動作主」のいずれと見なしうるか、という2つの観点から、微妙に性質の異なるものが含まれているということができる。s'éparpiller、se répandre等は、かなり中立的代名動詞に近いステイタスにあるといえる。あるいは「中立的代名動詞」である、といいきってしまってもいいかもしれない。

「姿勢にかんする動詞」も語彙的アスペクトの点で均質な集合ではない。 (44) の s'incliner は完了的であり、Vendler (1957) のいう «achievement» であるが、(45) の s'incliner は «state» である。

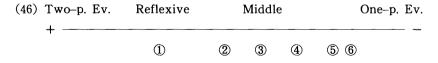
- (44) La tige s'incline vers le sol. (= (9b))
- (45) Le mur s'incline dangereusement. (= (10b))

se pencher の場合はどうか。se pencher が表わすものは、完了的な姿勢の変化である。ただ、3.2節で見たように、se pencher の主語には「動作主性」

が強く感じられる。これは先ほど見た se diriger や s'introduire と共通するものである。したがって se pencher の主語も «sujet sélectionnel»,本来的動作主であるものと考えられる。

5節で見たように、KEMMER (1994) は「姿勢の変化を表わす動詞」,「移動 を表わす動詞 | 等の «body action verb» を含む「中動 Middle Event | は、 «Degree of Distinguishability of Participants»のスケールの上で、純粋 な一項述語と二項述語のあいだに位置するものとした。さらに Kemmer はつ ぎのように述べる。これらの動詞においては、「身体の部分 body part」は被 動者でありながら同時に,「行為 action」の遂行にあたって多かれ少なかれ関 与をしており、その関与の程度は動詞のタイプによって異なる。そしてこの関 与の程度が高くなればなるほど,他者に向けられる行為とは見なしがたくな り、一項述語に近づく、というのである。たとえば「髭を剃る」、「髪を梳る」 といった「身体の手入れ」を表わす動詞の場合は関与の度合いは非常に低い。 「座る」、「起きる」等の「姿勢の変化を表わす動詞」の場合は、全身が対象と なる動作であるだけに、関与の度合いは高くなる。そして「空間的な移動を表 わす動詞 | においては最も高い。KEMMER の類型論的データによると、「身体 の手入れを表わす動詞」の場合は、自らの身体に向けられる行為と、他者の身 体を対象とする行為とが同じ語根にもとづく動詞形で表わされることが多い。 これにたいして「移動を表わす動詞」の場合は、自らの移動を表わす動詞と、 他者を移動させることを意味する動詞が同一の語根にもとづいているという例 はより少なくなっている (KEMMER 1994: 200-201)。

KEMMER の分析と、本稿の考察を重ねてみると、フランス語の代名動詞にかんして、つぎのような図式を考えることができる。



- ① se regarder ② se peigner ③ se pencher ④ se diriger
- ⑤ s'éparpiller ⑥ se briser

Two-p. Ev.: Two-participant Event One-p. Ev.: One-participant Event (37) に示した Kemmer (1994) の «Degree of Distiguishability of Participants» のスケールの上にフランス語の代名動詞の代表的な例をのせてみると、(46) のような形になると思われる。①の se regarder は「再帰」であり、最も二項述語に近いところに位置づけられる。②以下は「中動」として分類されるが、そのなかでは se peigner が最も二項述語寄りである。 se raser 等も同じタイプに属すると考えられる。⑤の s'éparpiller (se répandre や se réunir 等も同じタイプと考えられる)は⑥の se briser のような中立的代名動詞とともに、典型的な一項述語に最も近いところに位置づけられる。

7. 結語

本稿においては中立的代名動詞と再帰的代名動詞の関係を論じてきた。この2つはKemmer (1994) のいう《Degree of Distiguishability of Participants》のスケールの上で連続していくものであり、(46) のような形で表わすことができる。さらに中立的代名動詞は、他方において fondre、arriver 等の再帰代名詞をともなわない非対格動詞に連続していくものである。この点にかんして筆者は井口 (1995) においても論じているが、さらに発展させて他動性の全体像のなかで位置づけていくことを今後の課題としたい。

註

- *) インフォーマントは、Claude Lévi-Alvarès, Jean-Christian Bouvier, Catherine Vansintejan-Diot, Rodolphe Diot の各氏にお願いした。心よりお礼申しあげる。
- 1) Levin & Rappaport Hovav (1995) は、「方向づけられた変化」を表わすものではあるが、アスペクト的には «atelic» の動詞の例として英語の cool, widen のような «degree achievement verb» と、descend のような «atelic verb of change of state» の2つをあげる (voir p. 172)。
- 2)「身体の手入れ」を表わす代名動詞は、4節で見る Kemmer (1994) の中動態 (middle voice)分析においても重要な位置を占めており、興味ぶかいところである。
- 3) Legendre (1989) は動詞の非対格性をはかるものとして、《Object Raising》、 《croire unions》等、9種類のテストを設けているが、s'asseoir はこのうち 6 つ

- のテストでプラスの値をとっている。
- 4) 動作主表現をともなわない受動文の解釈を,動詞の完了性の指標とするのは, Zribi-Hertz (1987) 等がとりいれているものである。

《参考文献》

- Grimshaw, J. (1982): «Romance Reflexive Clitics», in J. Bresnan (ed.), *The Mental Representation of Grammatical Relations*, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- 井口容子(1995):「フランス語の再帰/非再帰形自動詞と非対格性」,『言語文化研究』 第 21 巻,広島大学総合科学部。
- Kemmer, S. (1994): «Middle Voice, Transitivity, and the Elaboration of Events», in B. Fox and P. J. Hopper (eds.), *Voice: Form and Function*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Keyser, S. J. and T. Roeper (1984): «On the Middle and Ergative Constructions in English». *Linguistic Inquiry*, 15–3.
- LEGENDRE, G. (1989): «Unaccusativity in French», Lingua 79.
- LEVIN, B. and M. RAPPAPORT HOVAV (1995): Unaccusativity, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Melis, L. (1990): La voie pronominale: la systématique des tours pronominaux en français moderne, Paris: Duculot.
- ROTHEMBERG, M. (1974): Les verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain, Hague: Mouton.
- Ruwet, N. (1972) : Théorie syntaxique et syntaxe du français, Paris : Éd. du Seuil
- VENDLER, Z. (1957): «Verbs and Times», The Philosophical Review 66.
- Zribi-Hertz, A. (1987): «La reflexivité ergative en français moderne», Le français moderne 55, n° 1/2.

《審報》

Trésor de la langue française, tomes 7 et 12, Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, 1979 et 1986.

Lexis, dictionnaire de la langue française, Paris: Larousse, 1975.

Le Petit Robert I, Paris: Société du Nouveau Littré, 1977.

鈴木信太郎他著『新スタンダード仏和辞典』、大修館書店、1987.

田村毅他著『ロワイヤル仏和中辞典』, 旺文社, 1985.

《例文出典(文学作品)》

Escarpit, R., La ronde caraïbe, 駿河台出版社, 1993.